

山田孝堂の学術と実践

— 幕末の懐徳堂・泊園塾と維新の〈実務家〉 —

横 山 俊一郎

Yamada Kodo-Theory and Practice
Kaitokudo and *Hakuen-juku* in the Last Days of the Tokugawa Shogunate

YOKOYAMA Shunichiro

Abstract

Yamada Kodo was a graduate of Kaitokudo, a private educational academy in Osaka, Japan. As a politician he became involved in the educational administration of Shikama prefecture during the Meiji Restoration, and as a manager, he made efforts to promote the local sericulture industry.

This paper will focus on the relationship between Kodo and Hakuen-juku, another private educational institution based in Osaka.

Key words : 懐徳堂、泊園塾、山田孝堂、産業振興、教育行政

はじめに

本稿では、筆者の研究対象である〈実務家〉としての儒者の一事例として¹⁾、播磨国小野藩儒者山田孝堂〔文化13(1816)年～明治27(1894)年〕を取り上げたい。第一章に見るように、孝堂は町医の家に生まれ、天保期に大坂懐徳堂で学び、安政の初めに上京して昌平坂学問所に寓し、後に小野藩の藩校帰正館の教授となった人物である。また、第二章に見るように、〈実務家〉としては、播磨全域を管轄するために明治政府によって設置された飾磨県の教育政策に関与している。

孝堂の活動状況を見ると、登用面では、県上層部からの高い評価によって抜擢され、職務面では、利害調整が求められる任務を遂行する等、筆者がこれまで考察してきた19世紀前半に瀬戸内諸藩の藩政に参与した懐徳堂出身者らと共通する特性を確認することができる²⁾。しかし、両者の間にはかなりの世代差があるのに加えて、その活躍する時代も江戸後期と明治初期で異なるため、〈実務家〉としての儒者の全体における孝堂の位置づけを明瞭にする必要がある。

そこで、本稿では、幕末期大坂における私塾の変遷、すなわち懐徳堂の衰退および泊園塾(泊園書院)の隆盛に注目したい。なぜなら、孝堂が活躍する19世紀後半は、まさに泊園塾が多方面に有為の人材を輩出した時代だからである³⁾。孝堂が維新时期に活動的になるのは、泊園塾の学術と何らかの関わりがあったからかもしれない。そうした想定のもと、第三章では、孝堂の幕末期における大坂遊学の実態を明らかにした。

一方、孝堂は維新时期において薬種商も営む等、一口に〈実務家〉といっても「政策者」のみならず「経営者」としての素顔も持っている。そこで、第四章では、孝堂が養蚕業を営む友人に経営上の助言をした「養蠶説贈某翁」について論じた。当時、開港による海外需要に支えられて製糸業と養蚕業が発展し、東日本地域における「僻土之貧民」を裕福にしていたが⁴⁾、孝堂

1) 儒者を考察するに当たって〈思想家〉と〈実務家〉に分類することの意義については、拙稿「江戸時代後期における〈実務家〉としての儒者—瀬戸内諸藩における懐徳堂学術の受容を中心として—」(『思想史研究』第17号、日本思想史・思想論研究会、2013年)参照。

2) 19世紀前半における瀬戸内諸藩での懐徳堂出身者らの活動状況については、拙稿「一九世紀前半における儒者の財政観—播磨国龍野藩儒者小西惟沖を例として—」(東アジア文化研究科院生論集『文化交渉』創刊号、関西大学大学院東アジア文化研究科、2013年)および前掲、拙稿「江戸時代後期における〈実務家〉としての儒者—瀬戸内諸藩における懐徳堂学術の受容を中心として—」参照。

3) これまで筆者が明らかにした19世紀後半における泊園塾出身者らの活動状況については、拙稿「幕末維新时期大阪における私塾の側面—撰津国旧藩主の社会的活動周辺から見る泊園書院・懐徳堂・梅花社—」(『東アジア文化交渉研究』、関西大学大学院東アジア文化研究科、第6号)および拙稿「多田海庵の海防意識—幕末の〈実務家〉としての儒者の一事例—」(『東アジア文化交渉研究』第7号、関西大学大学院東アジア文化研究科、2014年)参照。

4) 斎藤修・谷本雅之「在来産業の再編成」『開港と維新』日本経済史3(岩波書店、1989年)224～283頁参照。

は西日本地域に属する播磨において官吏の協力のもと養蚕業による富国を説いている。

そもそも富国とは、明治政府が推進した政策目標の一つであり、〈実務家〉としての儒者の一人である孝堂が、それに対してどのように対応したのかについて考察することは、懐徳堂出身者に限らず、近代へと連続する〈実務家〉としての儒者の実態解明に資するように思われる。そこで、筆者は「養蠶説贈某翁」を考察するに際して、孝堂の官吏に対する見方に沿って、その富国への対応を論じることにした。

本稿では、史料として『孝堂先生遺稿』（以下、『遺稿』）を用いる。『遺稿』は、孝堂の長男山田源太郎と次男窪田修佐が編集し、明治28（1895）年に出版された孝堂の遺稿集であり、上下二冊で全三巻（文・和歌・詩）から構成されている⁵⁾。

なお、長男の源太郎は、孝堂が晩年過ごした加古川町における実業団体の嚆矢とする「九五會」の設立者の一人である⁶⁾。「九五會」とは、明治31（1898）年に営業税が新設されたのを契機として、同年に加古川町の呉服業7名と、源太郎を含む他業5名が組織したものである。営業の発展を図る一方、同業者との摩擦を避け、進んで先進地の商業を視察し、誓文弘を実行する等成果の見るべきものが多かった。昭和以後も親睦実業団体として存続している。

次男の修佐は、『遺稿』の「藤澤南岳先生序」に「翁已使其子修佐行束脩于余門」とあるように、父孝堂の勧めによって泊園書院第二代院主藤澤南岳のもとで学んだ。また、明治29（1896）年には『京都繁昌記』という著作を残している。

1 出生と維新以前

孝堂名は翠、字は節である。文化13（1816）年播磨國小野藩の町医の家に生まれる⁷⁾。山田家は代々町医ながら御用医師として藩主や家中の診療に深く関わっていたらしい。居住地は小野町、家禄は二人扶持である。文政9（1826）年才能を認められ米三俵の手当を与えられ修行するよう藩命を受けている。

二十歳を過ぎてからは、もっぱら経済（いわゆる「経世済民」）の学を修め、兼ねて医術を研究するようになる。後に大坂懐徳堂の第五代学主中井碩果〔明和8（1771）年～天保11（1840）年〕に師事し、天保9（1838）年4月27日姫路藩の大庄屋三木通明の子通深が懐徳堂に入門した際、孝堂はともに碩果の講義を聴き賦詩を楽しんでいる。『遺稿』の「游争龍灘記」には「余

5) 本稿では、『遺稿』を史料として引用するに当たって、文中の句点および漢字は原文のままとする。

6) 加古川市誌編修委員会編『加古川市誌』（加古川市、1953年）438頁。

7) 山田孝堂の事蹟については、小野市史編纂専門委員会編『小野市史』第2巻（小野市、2003年）の他、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上（吉川弘文館、1969年）に記載され、その典拠とされるのは、加東郡教育会編『加東郡誌』（加東郡教育会、1923年）、加古川市誌編修委員会編『加古川市誌』（加古川市、1953年）、文部省編『日本教育史資料』第6巻（臨川書店、1972年）、藤田敬次編『小野旧藩誌』（歴史図書社、1978年）である。

語衆曰。余幼時寓懷徳書院。頼山陽翁來訪我先師」とあり、当時の懷徳堂には頼山陽が訪問していたようである。孝堂は後に大坂に塾を開いている。孝堂は大坂時代に篠崎小竹、後藤松陰、藤澤東暎、奥野小山ら梅花社、泊園塾の文人らとも広く交わり、儒学について疑問を質し、歴史や文学について議論を重ね一文を草すごとに師碩果の評を求めると意欲的に活動を続けた。

安政の初め四十歳余りになって江戸に赴き、大志を果たそうとする。『遺稿』の「書齋藤拙堂翁書幅」には「余青年寓昌平覺。常聞翁之事業。歸省際枉路于伊勢。訪翁之草堂」とあり、昌平坂学問所に寓し、先輩である斎藤拙堂の「事業」に関心を持ち、帰省時に当時伊勢にいた拙堂のもとを訪ねたという⁸⁾。藩命があつて大志を果たさず、帰郷して藩医に列する。安政5（1858）年6月帯刀御免、御徒目付役御擬七人扶持となり、薬種料金三両が給され、同年末井上顕碩、真嶋道伯、神吉敬純らとともに免血丸の製薬にあたる。

藩士教育における素読教授の人材不足を受けて、近郷加西郡北条村の医師村田有得を推薦する。文久元（1861）年10月、有得は二人扶持を給されて迎えられ、文久2（1862）年には孝堂自身が登用されて藩校帰正館の教授を兼務し医学・漢学を教える。その際、藩士のみならず、一般庶民の入学を許し、校舎も増築して帰正館における家中子弟教育は再開されることになった。

2 〈実務家〉として

次に、孝堂の〈実務家〉としての側面を確認したい。まず、維新时期における孝堂の飾磨県（現岡山県）の教育行政への関与の実態について見てみる。孝堂は、維新後の明治5（1872）年、学制発布の際に撰ばれて飾磨県学務総宰に就任している。退官した後は加古川町に移住して薬種商を営み、家の財産を大いに殖やしたという。

孝堂の飾磨県学務総宰の就任から加古川町への移住に至るまでの活動状況はどのようなものだったのであろうか。これに関して、『遺稿』の「讀觀光册子」に次のようにある。

維新之際。官有設立村學之命。而我縣庶務課長。①大野尚者。擔任學務。而訪余于加東郡。謀學校設立之議。將令余爲播全國總裁。余再三辭之。不聽。再有官命。不得已出。②而與尚相謀。選一郡擔頭二名。十六郡三十二名。東西派出周旋。於是。余亦日夜奔走從事焉。巡廻加東郡十有餘日。又從春至冬。巡廻十六郡。而設壹萬餘校。其校則假用寺院社廟。或借村長大家豪農之別莊等充之。纔建其基礎焉耳。其備教員者。舊藩士之徒。或巫醫。或緇

8) 斎藤拙堂〔寛政9（1797）年～慶應元（1865）年〕江戸の津藩邸で誕生。昌平覺で古賀精里に学び、古文に通じた。文政3（1820）年津藩校有造館創建とともに招かれ、講官、待読と進んだ。天保12（1841）年郡宰として治績を挙げ、弘化元（1844）年よりは有造館督学として文武学政を監した。才識明達、詩文に長じ交遊広く、育英の傍ら、文庫の充実や『資治通鑑』校刊など藩版事業への協力、また洋学や種痘など新知識の採用実施に努めた。『国史大辞典』第6巻（吉川弘文館、1985年）198頁参照。

流也。出余門者亦六十餘名。僅備其員耳。③其教則習字素讀算術。各任其所好。而不一樣。於是。又有國內教則歸於一体之命。余再出巡。集各郡教員。而傳之教則。然教員素不解石盤石筆之用法。筆算亦不知者往往有焉。④退以三才圖繪爲根據。命畫工島琴江。圖禽獸草木虫魚及農工兵諸器械。且其功用與利害。加鄙見。物品詳細傍記以贈之於文務省。乞之爲小册子。且自單語綴字至小學讀本。略備焉。教則亦歸於一矣。實小學教則書。從我播始矣。其時傳信纔通一線而已。此地之風土人情可以想見焉。⑤余從事學校已三年。至中學校設立。辭職而寓于慶川⁹⁾。

まず、孝堂は維新の際、官の村学設立の命を受けて、県の庶務課長に就いていたという。その当時、傍線①によると、「大野尚」という「學務」を担当する人物が、孝堂に会うためにわざわざ加東郡にやって来たらしい。そして、「學校設立」について相談し、孝堂を播磨全国の「総裁」にしようとした。この要請に対して、孝堂は再三固辞したが、「大野尚」はついに聞き入れなかったという。

明治10（1877）年出版の『官員録』によると、明治7（1874）年時点の「飾磨縣」の名簿において「八等出仕」「權大属」として「大野尚」、「十五等出仕」「縣掌」として「山田孝堂」の名前が確認できる¹⁰⁾。このように、孝堂は飾磨県学務総宰に就任するに当たって、県上層部から高い評価を得ていたことがわかる。

次に、再度の官命によってやむなく受諾した孝堂は、傍線②によると、「學校設立」に向けて、「(大野)尚」と相談して一郡の「擔頭」を二名選び、合計して十六郡三十二名をあちこちに「派出周旋」させたという。一方の孝堂自身はいつも「奔走從事」し、「巡廻」として加東郡に十日余り費やし、同じく十六郡に春から冬まで費やしている。このように、孝堂は、上司である「大野尚」と相談して部下を登用し、その部下を管理しつつ自らの任務を遂行しているといえよう。現代風に言えば、中間管理職ともいべき立場にあったのである。

さて、孝堂が遂行した任務は、学舎や教員の手配といった「學校設立」にとどまるものであったのであろうか。傍線③によると、その教えは習字・素読・算術であったが、各々「教員」が好むものを教えて一様ではない問題が浮上してきた。それに加えて、「國內教則」を「一体之命」に従わせることになり、孝堂は再び「出巡」して各々郡の「教員」を集めてこれに「教則」を伝えたという。このように、孝堂は「學校」「設立」だけでなく、「教則」「一体」の任務を引き受けることになる。

この「教則」「一体」の任務に対しては、孝堂は自らの考えを教育行政に反映させていく姿勢を見せている。傍線④によると、『三才圖繪』を根拠として姫路藩の御用絵師の子「島琴江」に命じて「禽獸草木虫魚及農工兵諸器械」を画かせ、その「功用」と「利害」に「鄙見」を加え、

9) 『孝堂先生遺稿』（卷之一「讀觀光册子」）参照。

10) 西村隼太郎編『官員録』（西村組出版局、1877年）明治7年毎月改正。

傍らに「物品詳細」を記し、これを「文務省」に贈り、小冊子とすることを要請したという。このように、孝堂は自らの考えを反映した教科書を作成し、それを日本全国に流布させることも意図していた。

傍線⑤によると、こうして孝堂は「學校」に従事すること三年、「中學校」が設立されるに至って辞職し、「麿川」に寓することになるのである。

以上のように、孝堂は、従来の家職を生かして薬種商を営むのに加えて、維新时期における飾磨県の教育行政にも関与している。上司となる大野尚の孝堂に対する出仕要請を見ると、孝堂は飾磨県の学務総宰に就任するに当たって、県上層部から高い評価を得ていたことがわかる。また、孝堂は部下である十六郡の担当者を管理しつつ、上司とともに学校設立の任務を遂行する、いわば中間管理職の立場にあった。

さらに、孝堂は学校設立だけでなく、教則一体の任務をも引き受けることになる。この教則一体に対しては、孝堂は自らの考えを教科書に反映させる等、教育行政に主体的に関与する姿勢を見せている。こうして孝堂は中學校が設立されるに至るまで、学校設営に従事すること三年に及んだのである。

3 大坂遊学の実態

次に、孝堂の幕末期における孝堂の大坂遊学の実態について明らかにしたい。これについては、『遺稿』の「書東咳先生文集後」が重要である。題目にある『東咳先生文集』とは、泊園書院初代院主藤澤東咳〔寛政6（1794）年～元治元（1864）年〕が撰した文集であり、東咳の子で第二代院主であった藤澤南岳〔天保13（1842）年～大正9（1920）年〕が編集し、明治17（1884）年に刊行されている。「書東咳先生文集後」では、孝堂がこれを入手して読み終えた後の感想が述べられている。

それによると、孝堂は『東咳先生文集』が出版されるのを待ち望み、それを手に入れると喜びのあまり、身を清めてからそれを誦えたという。読むにしたがって、かつて親交のあった人物を確認することができ、孝堂はあたかも旧友に再会しているような心地となり、青年期の當時を回顧した。一読しても当時の徳を慕う気持ちを抑えられず、再読するとそれがいよいよ感じられ、三読するとますます感服するようになり、ついにその思慕を止められなくなった。そこで、自分の卑見を残すところなく言い尽くすことにしたという。

まず初めに、孝堂は当時の大坂の学者について、次のように述べている。

其際余在浪華。下帷京橋藩邸。血氣旺盛。慨然有自立之志矣。然府下學士韻流。大抵輕佻

儂薄。以詩爲學問之上乘。余常慨于此。彼輩何知雅頌之爲何物。況經術文章乎¹¹⁾。

このように、孝堂が京橋の小野藩邸で塾を開いて教えているとあるところから、天保期に懷徳堂で学んだ後の批評であると推定される。まず、孝堂が常に嘆くのは、大坂の学者が「以詩爲學問之上乗」とする態度である。「上乘」とは、最高の学問方法というほどの意味である。孝堂は、彼らは文学や漢詩が何なのか、ましてや「經術文章」など知るはずもないと断じている。

次に、孝堂は大坂の学者の学問姿勢について、交友関係があった学者とからめて次のように述べている。

小竹筱翁。世稱博物碩儒。詩文亦可觀也。雖然。惜哉識不高。鬻詩售書。一紙半箋定價。與賈人何選。時時相見於文壇。而唯爲一場話耳。絶無景望念。非吾黨也。奥野小山。有文詩才。務脩飾邊幅。詭々有得色。是安小成之人。其内所養可知焉。松陰後藤翁。温順眞率。無虚飾。有文才。鴻往鯉來。一益友也。笛浦野田翁。帶公務來寓平野坊。醞籍博雅。謙讓不誇。有文才。君子人也。詩素非得意。不足觀。每月三次文會。必往而會焉。帷中有人。得益多。其餘抗顔稱師者。大鹽、春田、八木、香川、早埜、橋本之輩。皆一箇老書生耳。是余所親目擊。非敢驕慢輕議也¹²⁾。

まず、篠崎小竹については、時々文学の世界で出会い、その場限りの話をする関係であった。「詩文亦可觀也」と評価するものの、「鬻詩售書」として自らの文学作品を売るとし、「賈人」と何ら変わらないと批判している。最終的に孝堂は「非吾黨也」と結論づけている。奥野小山については、「有文詩才」としながらも、「脩飾邊幅」としてうわべを飾ることを批判している。孝堂は小山について「小成」に安んずる人物と結論づけ、「其内所養」がどれほどのものかが知られるという。

一方、後藤松陰については、「文才」があるのに加えて、「温順眞率」にして「無虚飾」という観点から評価し、「一益友」と結論づけている。後述するように、松陰とは、孝堂の塾の詩会で毎回出会う関係であった。野田笛浦については、松陰と同様に「文才」があるとともに、「醞籍博雅」にして「謙讓不誇」という観点から評価している¹³⁾。笛浦は公用のため平野坊（含翠堂

11) 『孝堂先生遺稿』（卷之一「書東咳先生文集後」）参照。

12) 同上。

13) 野田笛浦〔寛政11（1799）年～安政6（1859）年〕丹後国田辺に生まれる。十三歳の時江戸に赴き、古賀精里の門に入る。文政9（1826）年清国の船が清水港に漂着した際、駿府の代官羽倉簡堂が、清人と筆談出来る者を古賀侗庵に求めた。侗庵の推挙したのが笛浦であった。時に二十八歳。船を長崎に回航する迄の六十日の間、唱和した文詩が広く読まれて、名声が急に高まった。これにより江戸で教授し、大坂に講説のため出張することもあった。嘉永3（1850）年田辺藩主の知遇を得て帰藩し、儒員となり、学校奉行・執政へと昇進、禄二百五十石給与となった。斎藤拙堂、篠崎小竹、坂井虎山と共に、文章の四大家と

か)に寓しており、毎月三回文会で出会う関係であった。孝堂は笛浦について「君子人也」と結論づけながらも、その詩の才能は「不足觀」と苦言を呈している。

最後に、大塩・春田・八木・香川・早野・橋本の諸儒については、「抗顔稱師」として皮肉を込めて「一箇老書生」と結論づけている。

では、以上のような人物評価を試みるに当たって、孝堂はどのような評価基準を用いていたのであろうか。それは、「人」の内にある「養い」であった。孝堂は、「察人」、すなわち人を知ることについて、次のように述べている。

夫察才以詩若文猶可也。察人以詩文未可也。若論人必以事業。而察其内所養。則瞭瞭然。人焉廋哉。凡人飲食衣服及家宅百調度嗜奢靡者。必其内缺乏不少矣。且人不可以言語容貌長短取捨之。不可以貧富長幼輕重毀譽之。不可以博覽多才畏之。唯在其所養何如而已。有人于此。其下筆也。千言立成。其閱書也。五行並下。其賦詩也。險韻難題。限字探體。應聲走筆。五步一絶。十步一律。片片如湧出。誰不謂駿才乎。然若其内所養不存。是所謂群書中一蠹魚耳。不足畏也¹⁴⁾。

このように、孝堂は、人を知るには、「詩文」だけでは不十分であり、「其内所養」すなわち、「人」の内にある「養い」も知る必要があると主張している。

さらに、孝堂は、人が博覧或多才だけでは「畏敬」できないのは、誰からも駿才と言われる人物であっても、「其内所養」が伴わなければ、「蠹魚」すなわち、本を読むばかりで活用の才のない者であって畏れるには値しないと考えている。したがって、先述した「人」の内にある「養い」とは、要するに実践倫理を指していよう。

後に孝堂が東咳を学者として高く評価するのは、まさにこの評価基準によるものであった。

以下は、上記の「其内所養」という評価基準のもと、孝堂が同文のなかで東咳を評価している箇所である。

〔a〕 前輩嘗云。後生才性過人者。不足畏。惟讀書尋思推究者。爲可畏耳。格言哉。然府下無讀書尋思推究不怠者乎。曰有焉。東咳藤澤先生其人也¹⁵⁾。

〔b〕 終年矻矻。專力經義。拮据無虛日。育才教誨不倦。榮名不貪。日夜囁囁然自樂。其内所養可知矣。比諸輕佻儂薄以詩爲學問之上乘者。素不可同日而論也¹⁶⁾。

称せられた。『江戸文人辞典』（東京堂出版、1996年）292頁参照。

14) 『孝堂先生遺稿』（卷之一「書東咳先生文集後」）参照。

15) 同上。

16) 同上。

〔a〕によると、孝堂は『小学』嘉言第五の「前輩嘗説。後生才性過人者。不足畏。惟讀書尋思推究者。爲可畏耳」を引用し、大坂において書物を読んで思い巡らし、自らの学説を考究することを怠らないのは、藤澤東暎先生その人だという。

〔b〕によると、孝堂は東暎について「其内所養」がわかるとして、一年中骨折って「經義」に専念し、励んでも虚しい日は無く、「育才教誨」を怠らず、「榮名」を貪らず、いつも満足して「自樂」している、と指摘している。孝堂によると、こうした行ないは、他の大坂の学者が「輕佻儂薄」で「以詩爲學問之上乘」とするのとは、非常に相違のあることであった。

ところで、そもそも孝堂が東暎と交流する契機はどこにあったのであろうか。孝堂は今なお忘れられない当時の東暎の言葉を振り返り、次のように述べている。

余辱忘年之交。特親善能盡其平生。初下帷之際。先生來祝曰。此地京玉兩鎮銃隊所屯集。不可無一學校。余常憾焉。今君幸開校。深嘉獎焉。自今以後。以文事屢往復。子勿厭煩。懇情藹然。蓋其意爲道不辭勞。枉駕來謁婆心。毫無所挾。盡出於赤心。其言今猶在耳底。厚意未嘗忘矣¹⁷⁾。

これによると、初めて塾を開いた際、東暎がわざわざ孝堂を祝いに来てくれた。その時、東暎は孝堂の塾が「京玉兩鎮銃隊所屯集」に位置することを理由として、その「學校」が開校するのを「嘉獎」している。この「京玉兩鎮銃隊」が何という軍隊を指すのか不明である。少なくとも東暎はこの防衛目的に立脚する軍隊に興味を持ち、彼らに何らかの学問を施す必要性を認識していたといえよう。東暎はこの訪問をきっかけとして、今後、「文事」「往復」する関係になることを願うのである。

では、こうして東暎と親交のある孝堂は、東暎が率いる泊園塾とどのような関係にあったのであろうか。孝堂の門人高間六甲という人物は、まさに東暎がその入門を期待していたであろう「京鎮銃士」であった。六甲は孝堂より年長者であり、風流好学かつ書が上手だったが、それを人に示すことをせず、常に韓愈の『師説』を誦えて孝堂に従って学んだ。そこで、孝堂は六甲を推挙して泊園塾に入門させることにした。以下は、当時の状況を述べている。

余喜可知也。有門人高間六甲者。京鎮銃士也。長余廿五歲。此人頗風流好學且善畫。然深韜晦。不肯示人。常誦韓氏師説云。道之所存則我師也。何問年之少長。執師弟禮尤慎。余感其好學之篤。使進入先生門。有老莊荀韓會讀。先生使六甲來告于余。因時時陪席。先生優待特至。招余坐傍而並坐。未嘗門人視。每有奇説。舉以懇告。且問曰懷德堂之説何如。蓋以余學懷德堂也。其意在循々啓發以鼓舞諸生也。於是。弊社文會必聘先生。詩會招松陰

17) 同上。

寒泉二翁。松陰每會必來。寒泉以余汎交于他門。深忌之。余之汎交無他。欲質經義。問群疑。或議史論文。傍及學派。取捨鍊磨以進我業也。記事論說每一篇成。經碩果先生一覽。而後必乞先生高評。然各異所取捨。是則工夫之一端也¹⁸⁾。

このように、東暎が六甲を介して孝堂に泊園塾の「老莊荀韓會讀」に参加するように招待している。そこでは、東暎が訪問した孝堂を招いて並んで座り、いまだかつて孝堂を門人とは見なさず、友人として遇したといい、東暎と孝堂の親密な関係を窺わせる。

次に、孝堂は以前に学んだ懷徳堂とどのような関係にあったのであろうか。孝堂は東暎から懷徳堂の学説との関係を問われた際、孝堂の塾では、文会では必ず東暎を招き、詩会では後藤松陰と並河寒泉を招くと答える一方、孝堂が広く他門と交わることに對して寒泉が深く嫌っていることも述べている。

孝堂は自らの「汎交」は、「經義」を質して疑義を問ひ、「史論文」を議論して「學派」までその題材にし、「取捨鍊磨」して「我業」を進めるためだと主張する。自ら書いた「記事論說」は、まず「碩果先生」に見てもらい、その後で必ず「(東暎)先生」に高評を乞うたという。彼らの評価はそれぞれ違っており、こうしたことは自分の学問のあり方の一端を示すものだと結論づけている。

以上のように、孝堂は、当時の大坂の学者の学問姿勢を厳しく批判している。孝堂が常に嘆くのは、大坂の学者が「以詩爲學問之上乗」として、詩を最高の学問方法と位置づけ、文学や漢詩の働きどころか「經術文章」さえも理解していないことである。これを孝堂の交友に例えようと、篠崎小竹の「鬻詩售書」、奥野小山の「脩飾邊幅」として表れ、「其内所養」を知るべきではないとされる。この孝堂のいう「其内所養」とは、「人」の内にある「養い」、要するに実践倫理である。

孝堂によると、人を知るには、「詩文」だけでなく、この「人」の内にある「養い」も知る必要があると主張する。孝堂はこの「人」の内にある「養い」によって東暎を評価している。孝堂は東暎に対して「讀書尋思推究不怠者」と評しつつ、「其内所養」がわかるとして、「經義」に専念して「育才教誨」も怠らず、「榮名」を貪らずに「自樂」する行ないを挙げている。

東暎との學術交流を見ると、孝堂が自らの門人高間六甲を泊園塾に推挙し、東暎が泊園塾の「老莊荀韓會讀」に招待されてもいる。また、孝堂の塾では、文会では必ず東暎を招いており、一方の詩会に招き、後に懷徳堂最後の学主となる並河寒泉〔寛政9（1797）年～明治12（1879）年〕が、孝堂が広く他門と交わることに批判的であったことがわかる。

18) 同上。

4 富国への対応—官吏観をもとに

さて、孝堂は富国につきどのような理解を示していたのだろうか。これについては、『遺稿』の「養蠶説贈某翁」が重要である。

結論部分に次のようにいう。

嗟呼。翁家累世濟生之良心發溢。而與古人開物成務之美意自然相符也。聖賢治國之良法。人民富榮之基址。於是乎存矣。庶幾國家在官之人士。厚體翁意。擴充其事於各州。他日其濟業可知耳。於是。記以贈之¹⁹⁾。

このように、結論として、孝堂は、国家の官吏の職にある人士は、深く「翁意」を理解して自己のものとし、「其事」を各地方に押し広げて満たせば、いずれその「濟業」の立派さがわかるだろうと主張している。ここでの「其事」とは、「蠶事」すなわち「養蠶」を指している。ここで、孝堂は官吏のあり方をも提起しているのである。

では、孝堂はどのような観点から「翁意」を評価していたのであろうか。それは孝堂が詠嘆を込めて賞賛するように、「翁家累世」の「濟生之良心」が、「古人」の「開物成務之美意」と符合する点にあった。「開物成務」とは、人々の知識を開き、世の中の事業を達成させる、という意味で、『易経』繫辭上傳「子曰。夫易何爲者也。夫易開物成務。冒天下之道。如斯而已者也。是故聖人以通天下之志。以定天下之業。以斷天下之疑」から引用されている。こうして「翁家累世」と「古人」の思想が一致することではじめて「聖賢治國之良法」が「人民富榮之基址」となるのである。

次に、孝堂によってみずからの「濟業」を称えられ、「養蠶説」を贈られた「某翁」という人物だが、この「某翁」は官吏が見習うべき存在とされている。以下は、「某翁」の職業や居住地、修学歴がわかる箇所である。

〔c〕 我麩川驛。有某氏者。一郡之故家也。累世業軒岐術。今主某翁。夙志於養蠶術²⁰⁾。

〔d〕 余嘗聞翁幼年遊京師。學於頼翁之門多年矣。篤志經濟之學。常誦聖賢之書。而知義利之辨²¹⁾。

19) 『孝堂先生遺稿』（卷之一「養蠶説贈某翁」）参照。

20) 同上。

21) 同上。

〔c〕によると、「某翁」とは、代々医業を営む家の当主であり、以前から養蚕業に志す人物である。また、「養蠶説贈某翁」は、孝堂が加古川町に居住していた時の作なので、孝堂の県出仕が最後に確認できる明治7（1874）年以降の助言であると推定される。

〔d〕によると、「某翁」は青年期に京都に遊学し、「頼翁」の門に多年学んだという。ここでの「頼翁」とは、京都で私塾を開いた頼山陽を指していよう。「某翁」は「經濟之學」を志し、「聖賢之書」を誦え、「義利之辨」を知るに至ったのである。

では、実際の「某翁」の活動と孝堂とのやり取りを通して、孝堂によって評価された「翁意」を見ていきたい。まず、孝堂は「某翁」が「郷里」で受けた「走細利之誹」について次のように述べている。

春夏之候。翁與家人奴婢自取蠶事。孜孜不懈且業餘則繙蠶書。日夜研究不已。余竊嘉獎焉。然郷里有走細利之誹。余聞之不服²²⁾。

このように、「某翁」の「蠶書」の研究とその実践に対して、孝堂は「竊嘉獎」として奨励する立場にあったのに対して、郷里は「走細利之誹」として非難する立場にあったのである。ここで、孝堂は「郷里」における「養蠶」に対する偏見を提起しているのであろう。

次に、孝堂は「某翁」の遊学経験と「某翁」との文章交換を踏まえ、「某翁」が養蚕業に志す真意を推し測っている。

今臆度之。翁就蠶書古人所言而施之事實。經驗其當否何如耳。若果得其術。乃欲廣施於各村之窮民也必矣。是所謂期國家之公利。而不期一家之私利者也。翁若謀一家之私利。而不顧國家之公利。則有其本業之在。何倣瑣々婦女子之末技乎。蓋其所志遠且大矣²³⁾。

このように、孝堂によると、「某翁」が追求するのは、「一家之私利」に対置する「國家之公利」という概念である。また、それは「蠶書」にある「古人」のいう所を「事實」に施し、その「當否」を確かめ、結果として正しければ、広く村々の「窮民」に必ずそれを施さんとする態度に見られるものである。

後に孝堂が「某翁」のもとを訪れ、上記の推測を伝え、と、「某翁」から「是獲我心。無遺憾矣。我復何言。可謂知己矣」という返答を受けている。孝堂の予想は見事に的中したのである。

こうして「翁意」を汲み取った孝堂は、「郷里」における「走細利之誹」を解決すべく、次の行動に出ている。

22) 同上。

23) 同上。

余告郷里細民曰。方今欲起産業者。莫如養蠶之事。請倣於某翁。因之曩日誹議者。今反嘖嘖賞之不已。因謂是翁欲以嘗所學於師門親施於實業也。又可以觀其學術實用不苟之一班也²⁴⁾。

このように、孝堂は「郷里細民」に対して、今「産業」を起こすのであれば養蚕業が最も有利であることを訴え、「某翁」を模倣することを要請している。その結果、以前「某翁」を誹っていた者たちが、口々に「某翁」を褒めるようになったという。

では、孝堂はどのように「郷里細民」を説得したのであろうか。それは、恐らく「某翁」と同様に「古人」のいう所を重視したものであったであろう。孝堂は、先述した「郷里」における「養蠶」に対する偏見を提起するに際して、次のように述べている。

夫養蠶素非賤事也。在昔歷歷有制式矣。上自皇后。下至於公之夫人卿之内子大夫之命婦冢婦及士庶人之妻妾。皆供其事甚審矣。蚩民不解事。誹之亦宜哉²⁵⁾。

このように、孝堂はそもそも「養蠶」が「賤事」ではないとしながら、「蚩民不解事」という愚民観のもと、昔の「制式」を見れば、上は天子の「皇后」から下は士庶人の「妻妾」まで、世の婦女子は皆「蠶事」に供していたことを指摘している。ここに、孝堂が「古人」のいう所を典拠として「産業」に対する偏見に囚われた「郷里」を説得している様子が予想できるであろう。

しかし、孝堂は自らの「養蠶説」として「某翁」に贈ったのは、こうした「郷里」での説得だけではなかった。もう一方の「養蠶説」として「官」への提案が挙げられる。これについては、孝堂は次のように説いている。

余又有一説。曰我邦沃野幾千里。間地之可開墾者居多。擇荆棘之荒原。榛莽之山野。欲隨便開拓而遍植桑樹。盛養蠶之業也。官若許之。則使貧民移於其地。給之衣食。且教之養法。寬緩以誠意導之。懇懇育成。以使用之。其富國之實功。不出數年。而其洪益蓋不可測焉²⁶⁾。

このように、孝堂は「富國」策として、「官」による社会および経済政策を説いている。それは「官」によって山間の地を開拓し、桑樹を植えた後で、「貧民」をその地に移住させ、衣食を彼らに支給し、かつ、養蚕の手法を教え、養蚕業者へと「育成」し、「使用」する計画であっ

24) 同上。

25) 同上。

26) 同上。

た。ここに、孝堂が「貧民」救済を主眼とした「富國」策を「官」に提案する意思が窺われるであろう。

以上のように、孝堂は、国家の官吏に対して「翁意」を身につけて「養蠶」を普及させるならば、「某翁」の「済業」の立派さがわかるだろうという。それは「翁家累世」の「済生之良心」が、「古人」の「開物成務之美意」、すなわち知識を開いて事業を達成することと符合するからであった。この見習うべき「某翁」とは、京都の頼山陽に学び、「經濟之學」を志して「義利之辨」を知る人物であり、医業を本業として養蚕業に志していた。

まず、孝堂は「某翁」による「蠶事」に対して「走細利之誹」があったとして「郷里」における「養蠶」に対する偏見を提起する。次に、孝堂は「某翁」の真意は、「國家之公利」の追求であり、それは「古人」のいう所を「事實」に施し、その「當否」を確かめ、正しければ「窮民」に必ず施すという態度に見られるとした。

この予想が見事に的中すると、孝堂は「郷里」の「某翁」に対する誤解を解くべく、実際に行動し、「郷里細民」に対して今は「養蠶」が有利であり、「某翁」を模倣することを要請する。しかし、孝堂が自らの「養蠶説」として「某翁」に贈ったのは、こうした「郷里」での説得だけでなく、「官」への提案もあった。それは山間の地を開拓し、「貧民」移住を実施した後、養蚕業者として「貧民」を「育成」「使用」する「富國」策であった。

おわりに

本稿では、〈実務家〉としての儒者の一事例として、播磨国小野藩儒者山田孝堂を考察した。これまで筆者が考察してきた懐徳堂出身者と違って、孝堂は維新期に活躍し播磨全域を管轄する飾磨県教育行政に関与した人物である。孝堂が活躍した時期は、泊園塾が多方面に人材を輩出した時代と重なっており、藤澤東暎と親交があったことから、孝堂は当時隆盛していた泊園塾の学術の影響を受けていた可能性が高い。

まず、学術面では、孝堂の大坂遊学の実態を明らかにし、次に、実践面では、〈実務家〉として「政策者」に加えて「経営者」の側面にも注目した。さらに、孝堂の養蚕業を営む友人とのやり取りから富国への対応を官吏に対する見方に沿って考察した。

考察の結果、孝堂は維新期に「政策者」のみならず、「経営者」として「産業」に関する助言者として「郷里」で活躍していることがわかった。孝堂は、愚民観によりながらも、古典からの教養によって因習にとらわれる「郷里」を教導し、そこでの「利」に対する見方を転回させる役割を果たしている。

孝堂が某翁による「國家之公利」を賞賛し、某翁に対して、「官」の協力を前提とした「貧民」救済を伴う「富國」策を説くのは、孝堂の懐徳堂における上下一致の精神を継承している証拠となろう。ここに、江戸と明治の時代を越えて連続する通念を見ることが出来る。

一方、孝堂の学術交流を概観すると、孝堂の塾の文会に東暎を必ず招き、さらに孝堂が東暎主催の「老莊荀韓會讀」に参加し、孝堂が子の窪田修佐を南岳に学ばせる等、泊園塾の学術を深く受容している様子が知られる。また、後に懷徳堂教授となる並河寒泉が、そうした孝堂の広く他門と交わることを批判している事実からは、孝堂の泊園塾と懷徳堂の塾主との関係において対照的な結果を見ることができる。

結局のところ、孝堂の実践思想の根幹には、「経術文章」の機能を重視した、「人」の内にある「養い」があり、それが東暎を高く評価する物差しになったと考えられる。孝堂がこの通念をいつどこで獲得したのかは定かではないが、孝堂が昌平黌の寄寓時に斎藤拙堂の「事業」に関心を示している点からして、昌平黌関係者の間にそれが共有されていた可能性が考えられる。本稿での成果を踏まえ、昌平黌の地方藩士受入先であった書生寮での教育とその出身者の活動実態、それと大坂私塾での教育との関わりの解明を今後の課題としたい。